豊後国府推定地周辺の発掘調査

―大分市古国府・羽屋地区の近年の調査から―

讃岐和夫

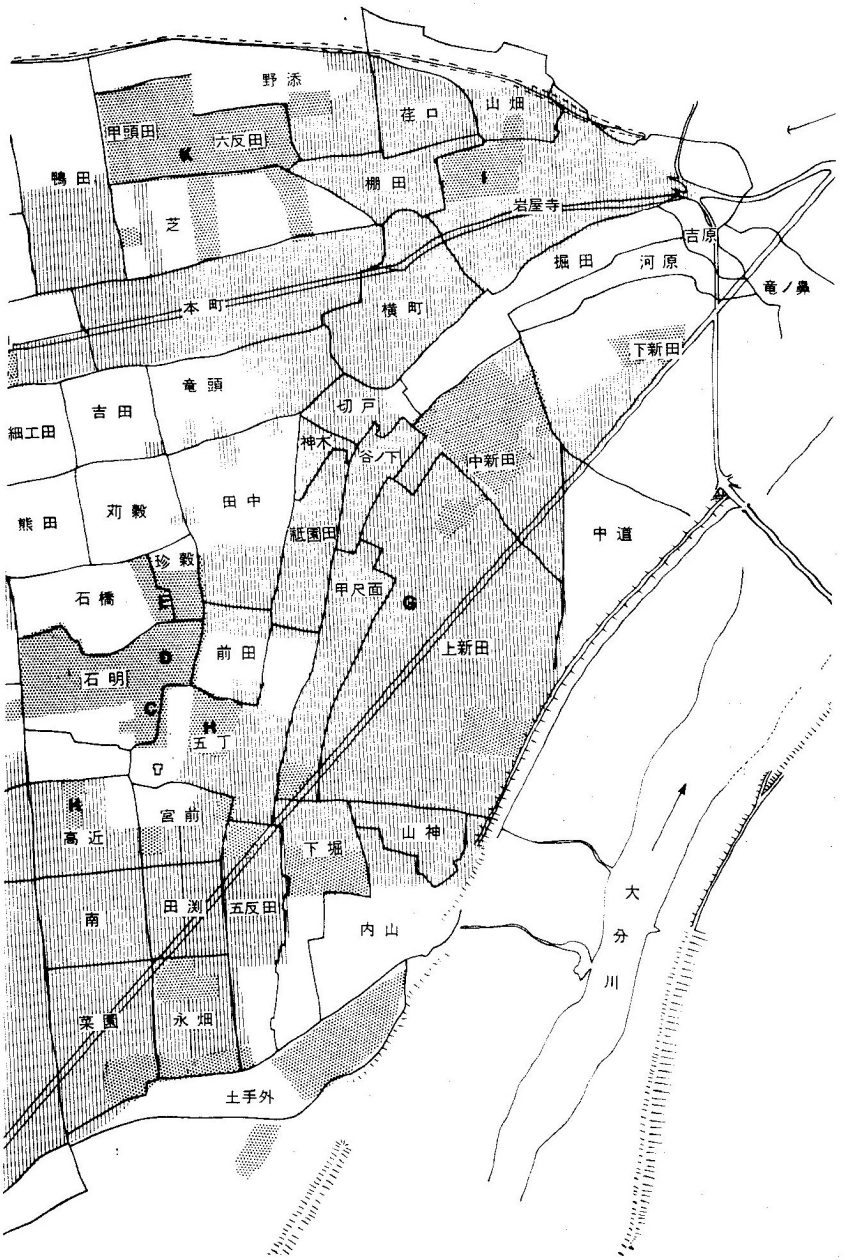
大分市大字古国府地区は、周知のように古代豊後国の国府があったと推定されている所である。この地域一帯は近年、急速に宅地化がすすみ、かつての水田は、今過半が住宅地となっている。このままでは、豊後国府跡の確認がされないまま永久に失われてしまう状況であるため、大分市教育委員会は、この地域における宅地開発に伴い、たびたび緊急発掘調査を行なってきた。その成果はなお未整理の所が多く、資料としては未だ活用できる状態になっていない状況であるが、ここに近年発掘調査を実施した所について遺構・遺物の概要を紹介したい。

あわせて、豊後国府の所在をめぐる問題について、これまでの考古学的調査をふまえて言及しうると思われることについて二、三の私見を付したい。〈（　）内の地区名は次頁図参照・以下同〉

(1) 羽屋字雲田・銅給・国政地区（A地区）

大分市では、古国府地域での宅地開発に伴う緊急調査を、ここ数年にわたり実施してきたが、とくに、この地域での本格的な調査が開始されたのは、昭和四十八年に市立豊府小学校建設用地の調査①においてである。この時、大字羽屋字雲田・銅給・国政においてトレンチ等による調査を実施した。

その結果は、溝状遺構が検出されたのみで建物跡に関する遺構は確認できなかった。溝は東西方向に三本走り、各溝の巾は


野添
荏口
山畑
甲頭田
六反田
K
鴨田
棚田
I
芝
岩屋寺
吉原
掘田
河原
竜ノ鼻
本町
横町
下新田
竜頭
吉田
細工田
切戸
神木
谷ノ下
中新田
熊田
苅穀
田中
祇園田
中道
珍穀
石橋
J
甲尺面
G
上新田
前田
石明
D
C
H
五丁
宮前
高近
下堀
山神
大分川
南
田渕
五反田
内山
栗園
永畑
土手外

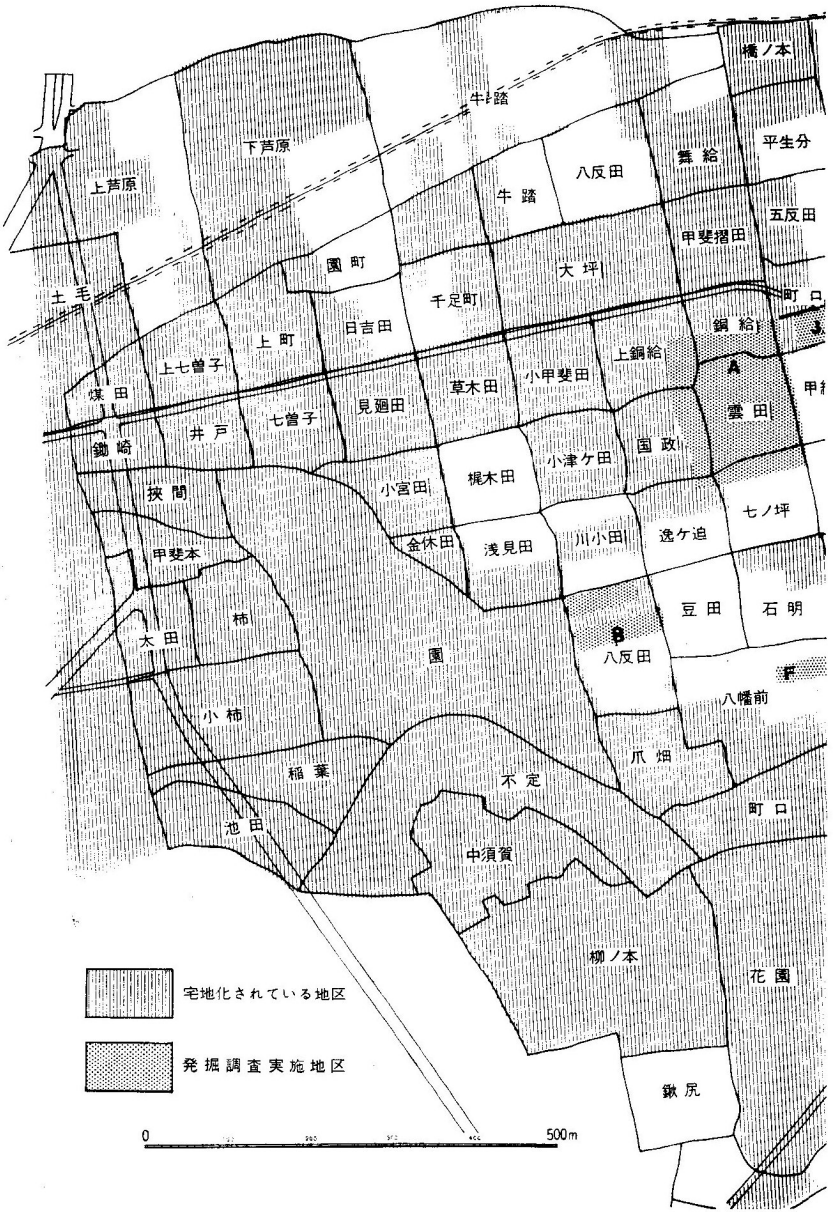


図1　大分市古国府・羽屋地区の小字と発掘地点

一・五メートル、深さ〇・五メートルを測る。断面U字形を呈し、茶褐色土を含む灰色粘質土が埋っていた。遺物は、中世の土師器、須恵器、瓦器、青・白磁等の破片であった。以上の様に、古代の国府に関係する遺物・遺構は全く確認できなかったとくに、溝状遺構は条里に関係するものと報告された。

(2) 羽屋字八反田地区（B地区）

昭和五十二年に調査を実施したが、ここでも期待は見事に裏切られ、特記すべき遺構、遺物については全く確認することができなかった。

(3) 古国府字石明（C地区・D地区）

昭和五十三年以後、宅地開発に伴う調査が急増してくる。すなわち、昭和五十三年には、印鑰社（現大国主社）北側の古国府字石明において、約二三〇〇平方メートルの全面調査を実施した。この場所は、古くから国府跡推定地として、最も有力な場所とされているため、調査も特に慎重に進められた。

その結果は、柱穴群、井戸、大型竪穴、溝状遺構（区画）と古墳時代の住居跡が確認された。柱穴群については、調査区の北と南に分れて集中しており、とくに印鑰社側（南）には、三間×三間の総柱である倉庫が一棟確認された。井戸については調査区全体から約十二基ほどが確認されている。井戸は、平面では直径二メートル前後と三メートル〜五メートル以上の円形で断面は漏斗状を呈するものと円柱状を呈するものがある。

井戸からの出土遺物は、土師器の坏・皿と底の方から竹・木材片・木葉・ワラ状のものが多量に堆積しており、竹簡・木簡などの出土について注意を払ったが確認されなかった。調査区北側では、大形竪穴遺構（池）が三基掘られており、南側面には石積が施され、一本の溝で大形竪穴は、つながっていた。さらに、区画を意図した溝が調査区を囲むように西側隅で南方向へ曲っていた。

遺物については、玉縁の付いた白磁碗、青磁は櫛描やヘラ描を施した碗、瓦器碗、スリ鉢（備前系）や土師器の坏・皿・瓦

等が多量に出土した。出土遺物からみて、十三世紀を中心として遺跡が存在したと思われる。いずれにせよ古代の国府に関係するものはなかった。また昭和五十六年には、石明調査区北側（D地区）を調査した。ここでは、東西方向に走る溝が五本確認された。とくにここは大形の溝で区画されており、石明地区は、大形の溝で北側を仕切り、その内側を小溝によって区画していることがわかった。

(4) 古国府字石橋・珍穀・羽屋字八幡前（E・F地区）

石明より北側にあたる字石橋、字珍穀については、昭和五十四年に調査を実施した。

ここでは、柱穴群と灰色粘質土で埋っている溝状遺構を確認した。また、石明より西側にあたる羽屋字八幡前についても昭和五十六年に調査を実施したが、ここでは東西方向に走る溝状遺構が確認されたのみであった。溝状遺構については、雲田、銅給、国政と同様、条里に関係する遺構と思われる。

(5) 古国府字五反田ほか（G地区ほか）

五反田から堀田までは、一段低くなった場所で、大分川の氾濫による影響で地割などかなり壊れている。字下堀・甲尺面・上新田・中新田・下新田については、遺構、遺物は、まったく確認されなかった。

(6) 古国府字五丁・高近（H地区）

昭和五十九年に字五丁・高近について調査を実施しているが、字石明と同様な遺構、遺物であった。高近については、古くから巾二～三間の濠があったと伝えられているが[2]、今回の調査では確認されなかった。

これまでの調査により、石明から花園にかけては、十三世紀を中心とする遺跡の存在することが明らかとなった。

(7) 古国府字岩屋寺（I地区）

昭和五十六年に、古国府字岩屋寺の調査をおこない、上野丘台地の南裾部に遺跡の存在することが確認された。遺構の状況は、溝状遺構、柱穴群（建物・角柱）、土器溜り、井戸二基であった。調査区の北側では、巾三メートル・深さ一・五メート

ルの大形の溝を東西方向に掘っていることが確認された。この状況は、字石明の様子とよく似ている。大形溝の内側では、柱穴群（角柱）と小溝が大形溝にぶつかる様に数本掘られていた。これは、排水施設と思われる。また、溝から多量の瓦が出土しており、瓦を葺いた建物があったと考えられる。とくに、建物については、二～三回の建替があったらしい。遺物については、青磁の碗には、草花文がある。白磁には、染付皿、高台付皿がある。他にスリ鉢（備前系）、土師器の坏、皿、器台が多量に出土した。瓦類では、軒丸瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦で、軒丸瓦については、三巴文で尾が長いものであった。これらの遺物からみて、この地区の遺跡の時期は、十四世紀から十六世紀にかけてと思われる。

岩屋寺地区発掘状況

(8) 古国府字町口（J地区）

また、昭和五十六年に、豊府小学校横の町口について調査をした。その結果は、岩屋寺と同様の遺物・遺構であった。以上のことからみると、岩屋寺本町・町口にかけては、十四世紀から十六世紀にわたり、長い間遺跡が存在したことがわかる。

(9) 古国府字野添（K地区）ほか

野添・六反田・甲頭田・芝原・鴨田等については、遺構・遺物の存在はまったく皆無であった。

以上、昭和四十八年から五十九年にかけて調査を実施した結果であるが、要約してみると、次のようになる。

(1) これまでの調査では、古代の国府に関するとみられる遺構と遺物は皆無であった。以上に紹介した地域に古代の国衙の中枢がある可能性は、うすいと思われる。

(2) 石明―花園地区では、石明の北側に大形の溝が東西方向に掘られ（境界）、内側では、小溝による区画を施している遺跡が広がっている。時期は、十三世紀を中心に、わりあい短い時代だったらしい。とくに、字花園には、大友氏別荘・高近には二～三間の濠があったと古くから伝えられているが、上記の遺跡がこれらと関係するかどうか今後の検討を待ちたい。

(3) 岩屋寺―町口地区では、上野丘台地の裾に近い岩屋寺町b地区では大形の溝（濠）が掘られ、内側に小溝が、排水施設として数本掘られている。また、瓦を葺いた建物があり、二～三期の建替が考えられる。遺跡は、一四世紀から一六世紀にかけて長い間存在している。これらからみるとおそらく岩屋寺、本町、町口地区は、一四世紀ごろから、民家あるいは武家の屋敷の並ぶ町並みを形成していたのであろう。その中でも、とくに岩屋寺地区の遺構については寺跡か、大友氏家臣団の居館でないかと考えられる。いずれにせよ、この地区も、古代官衙にかかわるとみられる遺構はないとせざるを得ないと思う。

(4) 八幡前、八反田、石橋、珍穀については、条里に関係する遺構が確認されたが、ここでも古代の建物跡、施設等はなかった。

(5) 五反田―堀田は、大分川の氾濫で地割もかなりみだれており、また一段低い場所である。遺構、遺物は、皆無である。

(6) 雲田、銅給・国政・野添・六反田・甲頭田、芝原、鴨田に関しては、(4)と同様な遺構であろう。また建物に関係する遺構は、なかった。

およそ以上のとおりであるが、現状でいえば、発掘調査の内容からみて、古国府地域に古代の豊後の国府が存在した可能性は、うすいといわざるを得ない。国府をこわした上に中世の遺構があるのだと考えても問題が残る。一帯は沖積平野であり、たとえ中世以来の再開発があろうとも古代の宮衙跡があったのであればその痕跡が皆無となることは、遺跡の性格上考えられないのである。にもかかわらず、これまでの調査では特記すべき古代の遺構は、まったく皆無であった。少くとも現時点でい

えることは、古国府地域には、中世の十三世紀かけての遺跡があったということだけである。十三世紀頃に栄えた石明―花園は、古国府の南側に位置し、大分川の河川に近接している。また、十四世紀から十六世紀に栄えた岩屋寺―町口は、上野丘台地の裾部に位置している。両者の遺跡としての性格は若干の相違があると考えられよう。

いずれにせよ、豊後国府の所在の問題は、右の状況からみて、さらに研究対象の範囲をひろげ、大字羽屋、上野丘の台地、さらに南大分から賀来一帯にかけて広く検討してゆかねばならないと思われる。③

註① 「市立豊府小学校建設地緊急発掘調査概要」（大分市教育委員会・昭和四九年）

② 渡辺澄夫「国府時代」（『大分市史』上巻・昭和三十年）

③ 最後に古国府・羽屋の主な調査場所を付記しておく

羽屋字八反田九四〇	(B)	昭和五十二年四月	大分市教育委員会調査	（試掘）
古国府字石明四五四	(C)	〃 五十三年六月	〃	（全面）
古国府字石橋・珍穀四三四	(E)	〃 五十四年十二月	〃	（〃）
古国府字岩屋寺四十五	(I)	〃 五十六年一月	〃	（〃）
羽屋字八幡前九〇四	(F)	〃 五十六年四月	〃	（〃）
古国府字町口二七一	(J)	〃 五十六年九月	〃	（試掘）
古国府字五反田六〇一	(G)	〃 五十六年九月	〃	（試掘）
古国府字石明四五四	(D)	〃 五十六年十月	〃	（全面）
古国府字五丁（町）	(H)	〃 五十八年八月	〃	（試掘）
古国府字高近	(H)	〃 五十九年十月	〃	（〃）

（大分市教育委員会・[redacted]）